

〈 修 士 論 文 構 想 〉

学級経営に関する一研究

— 学級の研究を通して —

天 笠 茂

1. はじめに

19世紀初頭、イギリスにおいてペルとランカスターによって考案されたモニトリアル・システムが、今日の学級による一斉教授方式の嚆矢とされていることは、すでに多くの人の知るところである。その後、時代が下るとともに学級による教授はプロシアの教育制度において定着、発展し、さらにアメリカ合衆国をはじめとして広く世界に普及していったのである。そして、我国においては、明治24年の文部省令「学級編制等ニ関スル規則」によって学級概念が確立し、学級は「一人ノ本科正教員ノ一教室ニ於テ同時ニ教授スベキ一団ノ児童ヲ指シタルモノニシテ、従前ノ一年級二年級ノ如キ等級ヲ云フニアラズ」と規定されるに至ったのである。そして、この後就学率の上昇ともあいまって学級による一斉教授方式は一般に定着し、今日に至っては、「学級とは何であるか、学級による授業はどうしてすべての学校において一様に見られることとなっているかについては、これを問題とすることがないほど日常化している^①」のである。学校といった場合、一般には、いくつかの学級に子どもが分けられ、そこにおいて授業が行なわれている様子がイメージされるほど、学級による教育が学校の主要な形となっているのである。このように学級の成立、発展の歴史に近代学校の成立、発展を読み取ることができるのである。そして、学級の本質を追求することは、そのまま近代学校の性格そのものを解明する糸口である、と言っても決して過言ではないであろう。

このような学級の歴史的変遷をたどるならば、今日の状況は、その発生当初にくらべ想像もつかないほど充実、発展したものと考えられるのである。しかし、反面、現代の学校教育が、急速に変化していく社会の諸状勢にうまく対応できなくなっている、と指摘されて久しい。そして、学校教育の問題をめぐって、これほどまでに人々の間で論議されることは、これまで例のなかったことと思われる。産業構造の変化が以前にもまして人々の教育に対する関心を高める結果になったようであるが、その関心が学校教育の欠陥に集中しているところに今日的な教育の問題があると思われる。授業について行けず「落ちこぼれ」ていく子どもの問題。その背景として、個人差を無視した画一的な一斉教授方式の問題及び教師の教授能力、児童掌握能力などの教育力の低下の問題。また、組織的な活動を組んで教育効果を高めることのできない問題。そして、子どもをめぐる教師と親の種々のトラブルに関する問題。等々、ちょっと考えるだけでもかなりの数の問題があげられるであろう。これら種々様々な問題は広範にわたり、しかも複雑に絡みあって、

その解決を困難にしているのである。そのような状態にあって注目を要すべきことは、それら問題の発生する場所を考えてみた時、一定数の問題が学校を構成している学級及びそこに関連した部分において生じていることである。学校に対する批判は、何らかの形で学級に関連していることに注目しなければならないのである。まさに、問題は学級において存在し、また、そこから他に波及している、と考えるべきであろう。

2. これまでの学級に対する研究の問題点

前述のように、様々な問題が学級やそれを取りまく所で発生しているのであるが、その問題解決に際し、これまでの学校経営研究や学級経営研究が十分にその役割を果たしているとは言えない状態にあることを指摘しなければならない。

その原因の究明については、詳細な分析を必要とすると思われるが、その一つに、教育事象を経営学的な視点から考察する研究の「前提的諸問題^②」がまだ十分に整備されていないことをあげることができよう。例えば、学校経営、学級経営というそれぞれの研究対象、領域、性格などがかならずしも明確にされていないことである。経済的な要因によって成立した学級の子どもの集団を教育的な集団にまで高めようとする学級担任教師の教育活動を学級経営と称し、一つの研究対象にしたことが学級経営研究の第一歩であったと考えられる。単級学校の時代は、それが学校経営の多くの部分を占めていたが、多級学校が成立するに及んで両者の間に相違が見られるようになったのである。その後、研究の積み重ねはあったもののブリード (Breed, F. S) がその著「学級編制と経営」(Classroom Organization and Management, 1933)で「教授方法論と学校経営論とが相互に進出すると学級経営論は母国なき民になるおそれがある」と学級経営概念の学問的曖昧さを指摘している。そのことは、学級経営研究が時代によって学校経営論と教授方法論との間を揺れ動いたことによって証明されている。そして、現在においても、研究者の立場によって位置づけ、学校・学級経営の概念の規定に相違が見られる。「学校経営」「学級経営」というそれぞれの概念を曖昧にしたまま、それぞれの名称を用いる研究も少なからぬ数にのぼっている中で、学校経営と学級経営の研究を明確に分離し学級における教師の活動は学校経営研究とは一線を画す動向がある一方、学校経営研究の中に学級経営を位置づけて行こうとする動きも見られる。

このような混乱は、それぞれの研究に微妙な影響を及ぼし、その成果の中に少なからぬ歪みを見出すことができるのである。一例として、それをこれまでの学級経営論の中に見出すことができるのである。

まず、これまでの学級経営論が学級内でのみ論じられることが多く、他との関連を欠き、学級外の様々な事象を捨象した形で成立してきたことがあげられる。これまでの学級経営論は、学校と学級の関係についても、①学校が主であり学級はその下請け的な機関とする、②学級の独自性が学校に優先し学校は単に学級の連合体にすぎない、③学校と学級は調和した関係にあり、それ

によって学校教育は成立する、と三者に分類し「形式論的平面上の問題③」と考えるだけで、真に学級間、学校内といった学校組織全体の中で学級の経営を位置づけるといった視点に欠けていたのである。また、学校全体で組織的に教育効率を高めていく視点に欠けた学級経営論が多かったのも事実であり、それらは、本来学校の持つ教育的機能を阻害するような役割を果たしたと考えられなくもない。このような学級経営論においては、「学級王国」に関する問題などには有効に対処できなかったのである。また、教授組織改革の動きの中から生まれた学年経営やティーム・ティーチングなどの新しい教育活動に対しては、学級経営論そのものの存在理由さえ問われかねない状況にあると言えるのである。

さらに、これまでの学級経営研究は、技術的、方法的な面のみ追求してきたため、理論面、原理面における研究が大変遅れていると考えられる。特に「経営」の対象の場となる学級そのものに対する問いかけ、原理的な考察を行なう姿勢に欠けている。学級そのものに対する問いかけを通して、「学級経営」とは何か、学級で行なう「経営」とは何か、といった考察がこれまで、かならずしも十分であったとは言えないのである。

一方、学校経営研究を見ても、これまた問題を含んでいると考えられる。学校経営の研究が学問的に成長・発展するに従って、学級の中の教師と子どもの活動をその研究対象から切り捨てていく動向が顕著になりつつあるように思われるが、学校経営研究が進むべき方向としては、いささか問題があるように思われる。それは、現在の学校の実態から見て、学級における教師と子どもの活動こそ学校の本質的教育活動であるにもかかわらず、これを研究の対象からはずした学校経営論に疑問を感じるからである。

以上、これまでの学校・学級経営研究の問題点を指摘してみたが、これらすべてが学問体系確立の未熟さに帰結すると言っても決して過言ではないであろう。朴聖雨氏の指摘するごとく「教育経営研究の実態と今までの趨勢からすれば、i) 研究の対象や領域、範囲に関する視角の不一致、ii) 研究の足場や土台となる用語、概念の混乱、iii) 適格な方法論的志向の欠除、iv) 研究の基本的枠組の未定立などの諸問題が横たわっている。したがって分科科学的考察の基底づけという点からすれば、未だ模索の域をぬけていないといえよう④」といった記述は、今日の研究がおかれている状況を示しているのである。そのような状況において、われわれが果たすべき役割は、「模索」からの脱出に努力することにある。

3. 研究の方法

以上のような認識から本研究においては、学級を対象として、学校経営研究における学級経営研究の位置、関連、性格、概念などを明らかにし、学校革新の叫ばれる現代の学校教育において、学級経営研究の理論化をはかる第一歩にしたいと考える。そのために、これまでの学級経営論が持っていた脆弱さ、概念の曖昧さを批判するとともに、その克服を意図するものである。

さらに、学級を1) 歴史的領域、2) 行政的領域、3) 財政的領域、4) 教授組織的領域、5) 教

育方法的領域、の五つの側面から取り上げ、現代の学校教育における学級の問題点、見方を整理し、学校経営研究における学級の位置づけを明確にすることを意図するものである。

これまで、学校経営研究の領域における学級に関する研究は周辺的な位置しか与えられておらず、断片的な研究は見られても、かならずしも総合的、体系的に研究されているとは言えない状態にあった。そこでは学級をトータルに分析した研究は余り見られず、学級による教育の功罪が一面的に論じられることが多かった。つまり、教授組織の研究においても、教育史の研究においても、それぞれ学級の部分的な解明はあったが、それが学級のすべてを解明しつくしたとは言えないのである。学校経営の研究が発展すればするほどその研究は深化し、領域も細分化されていくのだが、それと同時に、細分化された研究を全体的な立場から総合的に構造化・体系化していく研究も必要になってくるのである。この細分化、統合化といった両者が絡みあうことによって研究の体系が確立していくものと考えられるのである。

4. 本論の枠組

序 本研究の意義と課題

I 先行研究の成果と限界

- (1) 欧米における研究のまとめ
- (2) 日本における研究のまとめ

II 学級についての考察

- (1) 歴史的領域
- (2) 行政的領域
- (3) 財政的領域
- (4) 教授組織的領域
- (5) 教育方法的領域
- (6) まとめ

III 学校経営研究における学級経営の基本的問題

- (1) 学級経営研究の問題
- (2) 学級経営の概念
- (3) 学校経営と学級経営の関係

IV 学級経営論の構想

終 まとめと課題

(注)

- ① 海後宗臣「学級経営の本質」(宮田丈夫編『学級経営の理論と実践』明治図書 昭和44年)20頁
- ② 朴 聖雨「教育経営研究における前提的諸問題」(『学校経営研究』第一巻 昭和51年) 42頁
- ③ 高野桂一『学校経営現代化の方法』明治図書 昭和44年 162頁
- ④ 朴 聖雨 前掲書 42頁